住民流福祉
チラシ集

住民流福祉総合研究所
木原　孝久

＜目次＞

あなたの考え方は住民流？／３

業界流の証明／５

住民流でご近所福祉＜１０のキーポイント＞／7

住民流でサロン／９

住民流でボランティア／１１

住民流でマップづくり／１４

住民流で見守り／１７

住民流で助けられ上手／２０

住民流で助け合い／２３

住民流で認知症対応／２６

住民流の核心図／２９

あなたの考え方は住民流？

以下に、地域の福祉活動に関する問題とその解決策を９項目並べてあります。あなたは賛成ですか、反対ですか？

❶**引きこもり**の人が見つかった。ふれあいサロンに誘ったらどうか？

❷一人暮らしの人の安否が気になる。**見守り隊**を作って訪問しよう。

❸**認知症**なのに一人暮らしの女性がいる。危ないので施設の入所を勧めよう。

❹担当の**民生委員**の訪問を拒否する要援護者がいる。根気強く訪問しよう。

❺家族は**デイサービス**を勧めるが本人は畑に行くと言う。よく説得しよう。

❻認知症になっても**サロン**に来るので困る。家族に説得してもらおう。

❼施設に入所したのに、家に帰りたいと泣いている。家族が訪問すればどうか。

❽校区会館で**認知症カフェ**を始めたが参加者が少ない。意識啓発が必要だ。

❾民生委員や老人会、福祉委員などで、ご近所毎に**福祉推進体制**を作ろう

●これらは推進者主導・担い手主導の考え方。住民流は住民主導・当事者主導

９項目は、いずれも福祉の推進者側、または担い手側から問題を捉え、解決策を提示したものです。福祉に携わる人（プロも住民活動家も）の多くはこの方式で行動しています。一方の住民流は、住民側または当事者側から考える方式です。以下はその解説です。

●住民流ならこう考える

❶引きこもりの人がサロンに来たいと思うでしょうか？サロンだけがふれあいではありません。**引きこもりの人なりにふれあいをしている**はずで、それを探して応援すればいいことです（当事者主導）。

❷高齢者**一人ひとり、「私はあの人に見守られたい」という人がいる**ものです（当事者主導）。見守りにも相性があるのです。その人こそが見守りに最適な人材と言えるでしょう。

❸自分らしく生きたいと思えば、認知症でも、一人でも、在宅生活を願うのは自然なことです。たしかに「危ない」ですが、だから安全な施設に入れるのではなく、だからこそ皆で支える必要があるのです。本当の当事者主導とは、**たとえ危なくても、その人の生き方をできる限り尊重**することです。

❹民生委員の訪問は社会的な活動なのだから、それを受け入れるべきだと思われがちですが、当事者にとって自宅は私的で個人的な営みの場であり、**訪問者を受け入れるかどうかは私が決める**のだと考えます（当事者主導）。私的な営みの場だからこそ、住民は、相性の合う人同士、一対一で助け合っているのです（住民主導）。

❺福祉サービス自体、住民には違和感があります。人によっては、デイサービスに行くより、畑の方がよほど楽しいし介護予防の効果もある。**畑作業が実質的なデイだと住民は考える**のです（住民主導）。

❻「重い要介護でも住み慣れた地域でその人らしく生きられるように」と国は言います。自分らしい生き方に**必要と本人が思えば、サロンにも趣味活動にも受け入れるべき**です（住民主導・当事者主導）。

❼施設に入所し、施設の中だけで「その人らしい生き方」をするのは難しい。**自宅復帰が難しいなら、時々里帰りできるべき**です。友達の家やサロンに里帰りするという事例も。（当事者主導・住民主導）。

❽ご近所から遠い校区の会館を拠点に活動を組み立て、「こちらへどうぞ」と言っても、当事者は簡単に行けません。まず**どうすれば当事者が参加しやすいかを考える**のが住民流です。（当事者主導）。

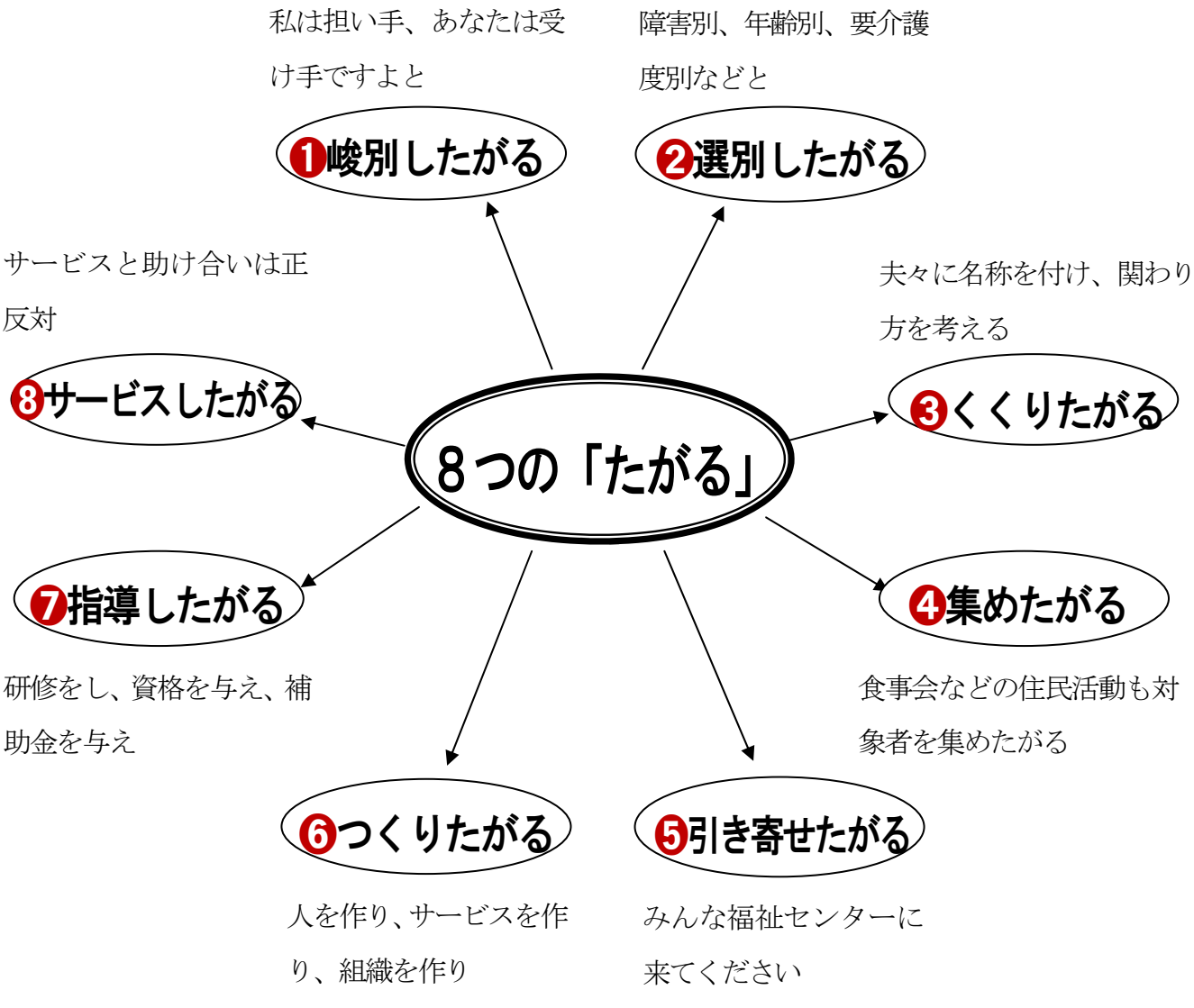
❾「ご近所」とは地域の末端－５０世帯程度の圏域で、住民の助け合いの場であり、実際に活動の中心になっているのは天性の人助けの資質を持った世話焼きさんです。**ご近所で推進体制を作るのなら、主役は世話焼きさんにすべき**でしょう（住民主導）。

業界流の証明

デイサービスで働く人は、対象を要介護度で選別し、寄せ集め、サービスを提供することに何の疑問も抱かないでしょう。このすべてが住民流に反します。

福祉業界で働く人は、下の８つの「たがる」傾向があります。これらは典型的な推進者主導、担い手主導の行動で、住民流とはまさに正反対になるのです。

8つの「たがる」



●解説●

❶峻別したがる

福祉関係者は、人を担い手と受け手に峻別することから始める。そして担い手が受け手にサービスを提供することを福祉と呼んでいる。住民流ではそもそも、担い手と受け手を分けない。

❷選別したがる

相手を要介護度や障害の重さなどで分別し、それぞれに適したサービスを提供するのが関係者のやることである。しかしこれでは、本人が持っている可能性の芽を摘むことにもなる。いろいろな障害や要介護の人が入り混じることで、意外な福祉効果が生まれるのだ。

❸くくりたがる

人は夫々、いろいろな面で異なっている。ひとまとめにすること自体、担い手の都合で福祉をやっている証拠だ。本来なら、人の数だけの関わり方を考えねばならない。これが当事者主体のあり方だ。

❹集めたがる

食事会などでも要援護者を集めて、一定のサービスを提供するのが常套手段になっている。関係者だけでなく住民にもこれらの「たがる」癖ができてしまった。業界流が住民活動家にも広がった。

❺引き寄せたがる

要援護者のところまでサービスを持っていくのは大変だ。だから関係者は、こちらが用意した場所まで来てほしいと言う。担い手もまたセンターまで来て活動するよう求められる。推進者の都合優先だ。

❻つくりたがる

サービスや活動、そのための活動組織などは、自分たちで作り出すものだと考えている人が多い。マップを作れば、住民はそれなりの活動をしていることがわかる。それを掘り起こし、支援すればいい。

❼指導したがる

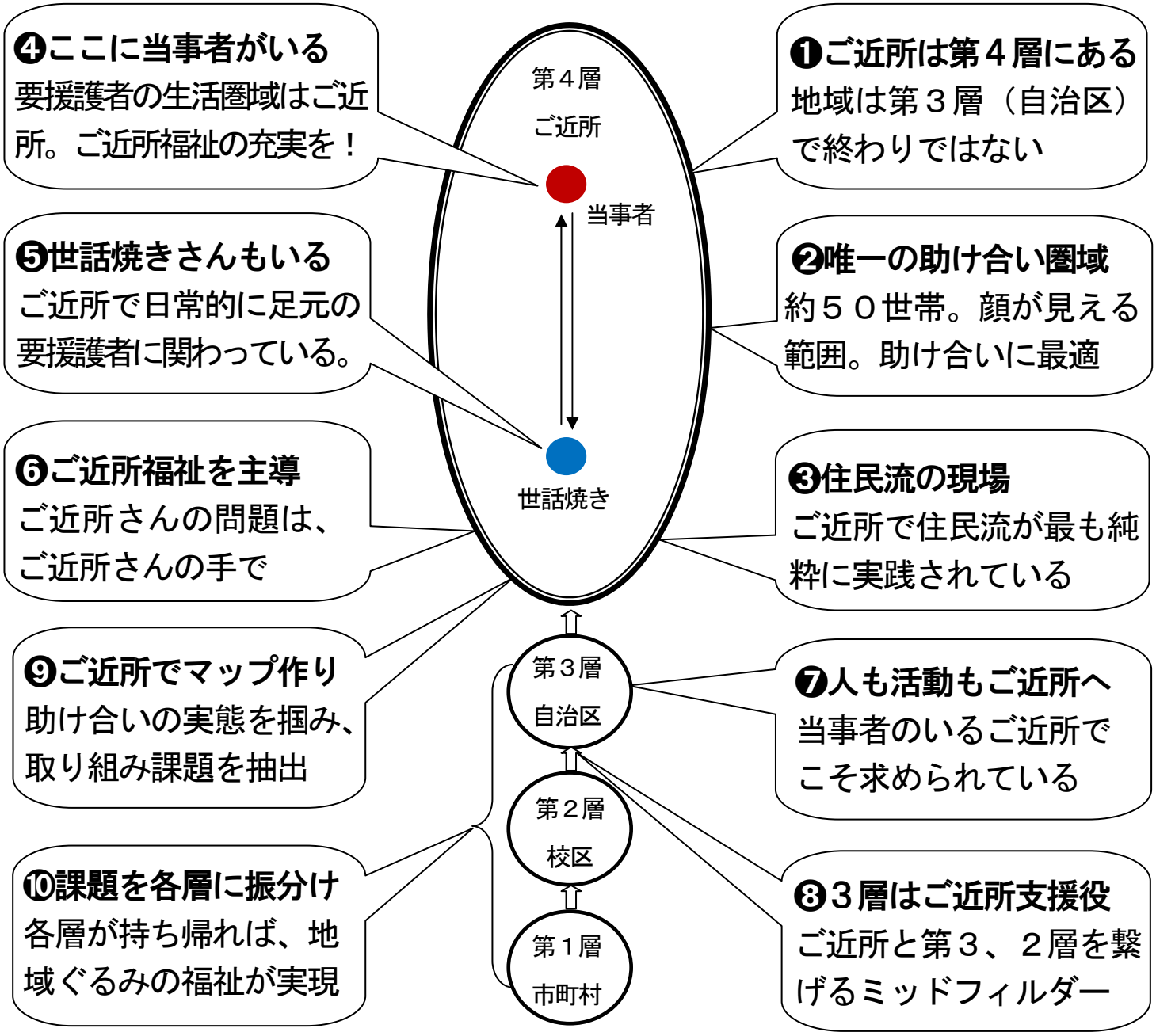
関係者は、住民は指導・教育する対象だと考えている。だから福祉講座を開き、グループを作らせ、やり方を教える。それよりも、彼らがご近所で始めている活動をマップで掘り起し、支援をすればいい。

❽サービスしたがる

サービスは助け合いと両極端にある。サービスは、担い手と受け手を峻別することから始まる。助け合いはその区分けをしない。サービスが始まると、受け手は受け手一方の立場に立たされる。

住民流でご近所福祉
＜10のキーポイント＞

ご近所福祉を住民流で実践する場合の１０の留意点



「住民流」ご近所福祉－１０のキーポイント（解説）

❶ご近所は第４層にある

地域は３つの層になっているといわれるが、じつは第３層（自治区）のあとに第４層があるのだ。自治区はいくつかの「ご近所」でできている。

❷唯一の助け合い圏域

第３層の自治区（数百世帯）では広すぎて、お互いの「顔が見えない」。約５０世帯のご近所なら「顔が見える」。だから助け合いがやり易い。この層が唯一の助け合いができる圏域。

❸住民流の現場

ご近所では、最も純粋に住民流の助け合いが実践されている。第２層、第３層と上がっていくにつれて、住民流が薄れていく。住民もご近所では住民流で行動しながら、上の層で活動する時は関係者流になる。

❹ここに当事者がいる

ご近所福祉が重要なのは、ここに当事者がいて、隣人の助けを得ながら生活しているからだ。彼らは、まずご近所福祉を充実させてほしいと願っている。当事者を第一に考えるなら、ここを最重点地区とすべきではないか。

❺世話焼きさんもいる

ご近所には、日常的に足元の要援護者に関わっている世話焼きさんがいる。第３層は世話焼きさんが活動するには広すぎるが、ご近所なら足元に当事者がいるし、当事者も世話焼きさんの支援を求めている。相思相愛だ。意外なことに、ご近所は人材の宝庫なのだ。

❻ご近所福祉を主導

関係者がご近所福祉に関わるのはいいが、関係者主導で進めてしまうと、助け合いは育たない。できるかぎりご近所の手で解決するよう後方支援にまわるべきだ。ご近所福祉の推進自体も世話焼きさんたちに委ねよう。

❼人も活動もご近所へ

活動家はご近所から出て第３層で活躍している。しかし、当事者はそこまで行けない。サロンも食事会もご近所へ戻ってやってくれれば、当事者も参加できる。これでご近所力はさらに強まる。

❽３層はご近所支援役

ご近所福祉を進めるご近所さんをバックアップするのが第３層の町内会や民生委員だ。サッカーで言う「ミッドフィルダー（司令塔）」。ご近所と第３、２層の生活支援コーディネーターとつなげば、それぞれが助かる。

❾ご近所でマップ作り

ご近所福祉の推進には助け合いの実態を把握する必要がある。助け合いは見えにくい（住民は見えないように実践している）。住宅地図を広げ、数名のご近所さんに聴取すると見えてくる。そこから課題を抽出する。

❿課題を各層に振分け

マップ作りに各層から参加し、抽出した課題を層別に分ければ、それぞれが分担すべき役割を持ち帰ることができる。これで、単なるご近所福祉が、すべての層を巻き込んだ「地域ぐるみの福祉」になっていく。

住民流でサロン

サロンが大流行だが、ただのおしゃべりではもったいない。世話焼きさんもいるし、どうせなら福祉推進センターにしたら？ そうなると要介護者もデイ利用者も施設入所者も加えるべきだし、困り事への対応も。要援護者も来やすいように５０世帯のご近所毎に開こう。引きこもりの人には押しかけサロンという手も。

よりよきサロンのための１０か条

❶ご近所ごとに

５０世帯でなら、要援護者も参加できる

❷要介護者も仲間に

送迎や介助、会場のバリアフリー化を

❸入所者もデイ利用者も

サロンへ里帰りも。デイ利用者も誘おう。

❹難聴者に通訳

会話の仲介役を付ければ、退会しない。

❺困り事の対応も

皆悩みを抱えて来ている。解決すれば喜ぶ。

❻男性に役割を

おしゃべりは苦手。役割を担ってもらおう

❼二次会が本命

ご近所で助け合い。要援護者も仲間に

❽お誘い名人

要援護者は遠慮する。お誘い名人の出番

❾押しかけサロン

重い要介護や、引きこもりの人の家で

❿ご近所福祉の推進へ

サロンがご近所福祉の推進センターに

●解説●

❶ご近所ごとに

数百世帯の町内毎に開くサロンでは、心身にハンディがある要援護者は参加できません。できれば５０世帯のご近所毎に開きましょう。町内ごとに開いた後、メンバーがご近所に戻って二次会を開く手も。

❷要介護者も仲間に

サロンは元気な人の集まりとされ、要介護者は参加できていませんが、重い要介護でもその人らしく生きるのを支えるのが本来の福祉。送迎や介助、会場をバリアフリーになどの課題をクリアしましょう。

❸入所者もデイ利用者も

施設に入所した人が、サロンに里帰りするという事例もあります。デイサービスを利用しても、週のうち４～５日は自宅にいます。家族は遠慮しがちですが、本人は、積極的に誘えば来るはずです。

❹難聴者に通訳

高齢になれば耳は遠くなるもの。相手の話が聞こえないと、サロンから遠ざかってしまいますが、あるサロンでは、本人と仲間の会話を仲介する「通訳」が活躍していました。誰でもできることです。

❺困り事の対応も

「楽しいおしゃべりの場で困り事なんか持ち出さないで」と言う人もいますが、高齢になれば誰でも困り事を抱えているものです。それを皆で聞き届け、解決してあげれば、もっと参加者が増えるはずです。

❻男性に役割を

サロンの悩みは男性の参加が少ないこと。男性は、ただおしゃべりをする集まりは苦手です。男性には何か役割を担ってもらえば、参加しやすくなります。機械の操作、写真撮影、経理など。

❼二次会が本命

各自ご近所に戻って井戸端会議型の二次会を開けば、要援護者も参加できます。じつは、ご近所には井戸端会議型のサロンがたくさんできています。それこそが住民流サロンの本命なのです。

❽お誘い名人

サロンの参加を募る場合、「お誘い上手さん」の役割が大きいようです。天性の資質で、こういう人を上手に活用しましょう。要介護になると本人も家族も遠慮しがちですが、皆で誘えば来るのでは？

❾押しかけサロン

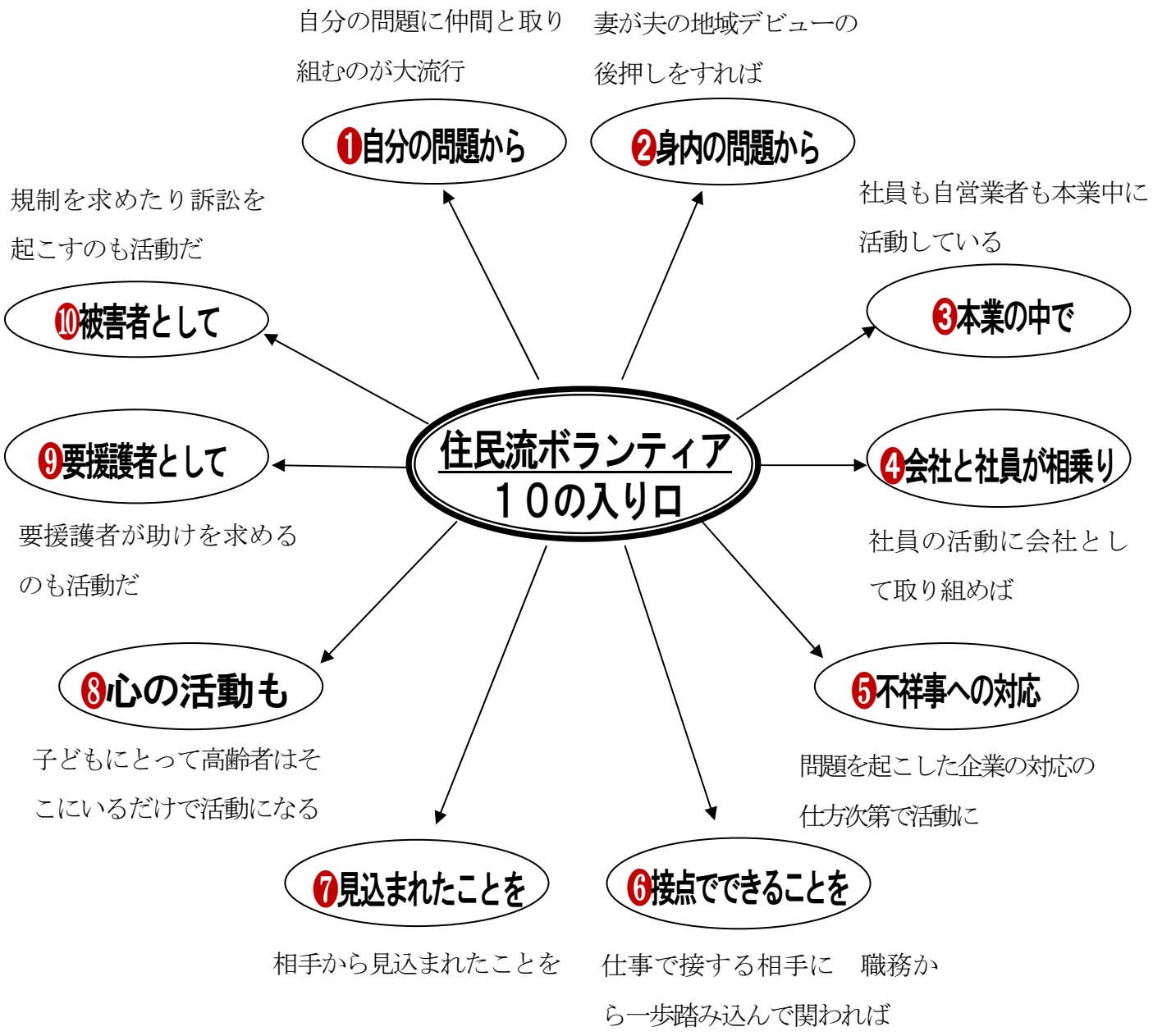
重度の要介護や男性の引きこもりさんの場合、サロンに連れ出すよりも、本人宅を３，４名で訪れて、そこで即席サロンを開く方法もあります。実際にやってみると、案外歓迎されています。

❿ご近所福祉の推進へ

小さな圏域で、世話焼きさんたちが揃っているサロンなら、思いきってご近所福祉を推進してみたらどうでしょう。メンバーが足元の福祉問題を持ち寄り、みんなで話し合って解決していくのです。

住民流でボランティア

「ボランティア」の定義を狭めるほど、参加しにくくなります。住民総ボランティアを目指すなら、その枠を思いきって広げてみましょう。日常生活の中でできる小さなことや、本業でできることも、要は「社会のため、人のためになる活動」だと考えれば、誰にもその機会はあるし、実行しているはずです。心の活動なら、健康でなくてもできます。また、社会のために「良いことをする」（正の活動）だけでなく、「悪いことをしない」（負の活動）のもまた、社会活動の入り口になり得ます。



❶自分の問題から

自分自身の問題に目を向けて、同じ悩みを持つ仲間と一緒に解決していき、そのノウハウを他の仲間たちにもおすそ分けするというあり方（セルフヘルプ）が爆発的に広がっている。

❷身内の問題から

退職した男性が家に引きこもるのが社会問題に。立ち上がったのは妻。地域デビューのチャンスを探しては夫に参加を促す。１０年かけて、夫と地域のつながりをつくり上げた女性も。

❸本業の中で

欧米人は休日に地域で活動するが、日本人は本業の中で業務中にやる方が向いている。しかも「モチはもち屋」の腕を生かして。ホテルが障害者の作業所の焼菓子コンテストを開き、優秀な商品にホテル推奨マークを付けて販売。学習塾が病気や事故で入院中の小中学生に無料で家庭教師を派遣など。

❹会社と社員が相乗り

社員が個人的に始めた活動を会社が応援したり、その活動に会社全体として取り組むことで、素晴らしい社会貢献活動が生まれている。「活動は余暇に個人で」と限定することはない。

❺不祥事への対応

事故米が流通した時に、食品会社１社だけが、自社商品に混入した可能性がある事実を自主的に公表した。こうした行動も一種の社会活動として評価していい。それだけでなく、企業が不祥事を起こしてしまった時に、その立場でこそできることに本気で取り組めば、社会のためになるのだ。

❻接点でできることを

ガスの検針員が、検針ついでに一人暮らし高齢者の布団を取り込んであげたり、買い物に行ってあげたりしていた。様々な役割の人が、職務から一歩踏み込んで相手に関わっていけば、立派な活動になる。

❼見込まれたことを

じつは活動テーマは、私たちの足元に来ている。それを受け入れれば活動になる。ある駅前商店が、普通なら「迷惑」と考える客の要望にことごとく応じて、「買わなくても両替えします」「荷物も預かります」「傘を貸します」「地図をあげます」とやっていた。

❽心の活動も

活動は、健康な人しかできないわけではない。７４歳の幼稚園の先生がいた。まるで森林浴でもするように、その女性がそばで見ているだけで子どもたちは満足する。悩み事のある子は、黙って彼女の手を握って「充電」していく。子どもにとって高齢者は、

そこにいるだけで活動になるのだ。

❾要援護者として

要援護者が自分の問題をオープンにし、必要な支援を積極的に求めていけば、民生委員や関係機関は大いに助かる。これを欧米ではセルフケアマネジメントと言っている。立派な「活動」なのだ。

❼被害者として

シニア男性の社会活動への参加が課題になっているが、福知山線脱線事故などで原因と責任を明らかにするために訴訟の先頭に立ったり、再発防止策を求める運動をしたりしている人たちの多くがシニア男性だ。これも活動としてもっと評価すべきではないか。殺人事件の時効を廃止させたのも遺族たちだ。

住民流でマップづくり

支え合いマップも住民流福祉活動の一環だと思っている人は少ないでしょう。しかし、支え合いマップは住民流の実践過程で生まれた発想であり、マップを作ったのに「問題が見えない」「取り組み課題が出ない」という時、それは住民流でマップを作っていないからなのです。そこで、「住民流でマップを作る」とはどういうことかを整理してみました。

住民流福祉とマップの関係

❶ご近所毎に

■マップ作りは約５０世帯のご近所毎に
■福祉はご近所ごとに進める

❷助け合いを

■ご近所さんに聴取
■ご近所さんの助け合いの実態を調べる
■結果をもとに良きご近所への課題抽出

❸見込んだ人

■当事者が誰を見込んでいるかが大切
■見込まれた人をそのまま容認

❹世話焼きさん

■すでに助け合いを実行している人を応援
■世話焼きさんをマップで探し、前面へ

❺世話焼きさんたちで推進

■ご近所主導で活動
■ご近所の世話焼きでご近所福祉推進
■極力ご近所で解決

❻司令塔役

■町内会や民生委員はご近所活動を応援
■課題を上層へ持ち出さず、ご近所で解決を支援。

❼ボトムアップ

■出てきた課題を各層へ振り分け
■第１、２、３層の関係者がマップに参加し、課題を持ち帰る。

●解説●

❶ご近所毎に＜マップは「ご近所福祉」を進めるための情報収集＞

支え合いマップは、およそ５０世帯のご近所ごとにつくります。ご近所は、市町村の第１層、校区の第２層、自治区の第３層に次ぐ第４層。助け合いにベストな圏域です。多くの人はマップ作りで要援護者を探し、サービスに繋げようとしますが、マップ作りは「ご近所福祉」を進めるための情報を集めるツールであり、ご近所（約５０世帯）ごとに作ることが重要です。

❷助け合いを＜要援護者探しでなく、要援護者に住民の誰が関わっているか＞

要援護者をサービスにつなげるだけなら、要援護者に印をつけるだけで十分ですが、助け合いの地域を作るためには、要援護者に住民の誰が関わっているかを調べる必要があります。

❸見込んだ人＜本人は問題を誰に解決して欲しいかが大切＞

福祉は当事者のための活動ですから、本人が問題を誰に解決して欲しいかを探るべきです。今の福祉では、要援護状態がわかれば、どんなサービスを提供するかは担い手が決めると考えます。本人はもっと高い要求を持っているかもしれないのに、担い手がそのレベルを決めてしまうのも変です。

❹世話焼きさん＜地域では天性主義が基本＞

要援護者と担い手は区分けされ、福祉機関が養成したボランティアなどが担い手とされていますが、地域では天性主義が基本です。ご近所ではすでに世話焼きさんが要援護者に関わっています。

❺世話焼きさんたちで推進＜ご近所福祉を「推進」するのもご近所さん＞

マップで見つけたご近所の課題に対し、関係者がご近所に断りなくサービスにつなげたりすれば、住民主体の助け合いは進みません。ご近所の課題はご近所さん主体で関わるのがスジ。ご近所福祉の推進も同様です。マップを作ると、各ご近所で世話焼きさんなど推進のための人材が一定数は見つかります。

❻司令塔役＜ご近所さんがフォワード。町内会や民生委員はミッドフィルダー＞

福祉活動は町内会や民生委員が行うものと思われていますが、主役はご近所さんです。ご近所の活動を支援しながら、難題でも極力ご近所さんの手で取り組むよう応援するの

が第３層の役割です。また第２層や１層にその役割を伝えていかねばなりません。サッカーならミッドフィルダー役です。

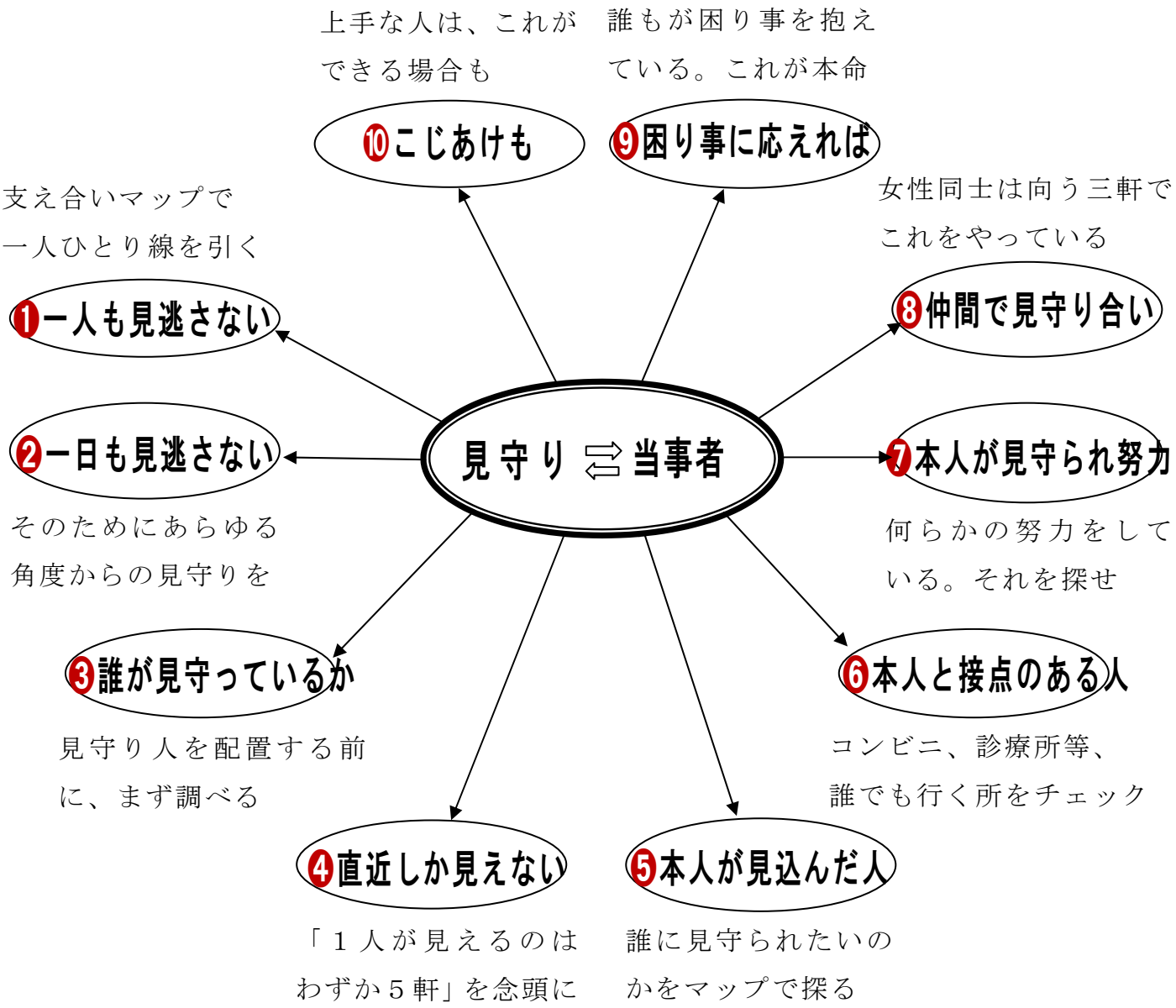
❼ボトムアップ＜関係機関もご近所のマップ作りに参加し、課題を振り分け＞

今の福祉は第１層で推進され、下層に指示を出すトップダウン型ですが、要援護者のニーズを把握するためには関係機関もご近所のマップ作りに参加し、課題を持ち帰ればいいのです（ボトムアップ型）。

住民流で見守り

生活支援の第一歩として見守り活動がこれだけ広がっているのに、孤独死がなくならないのはなぜなのでしょうか？

本当に孤独死を出さないためには、①一人も見逃さない、②一日も見逃さない、③当事者の立場から、をモットーに、以下の諸点を実行することが大切です。



●解説●

❶一人も見逃さない

孤独死を防ぐには、一人も見逃さないやり方が必要です。支え合いマップで、気になる人をすべて掘り起こし、見守っている人からその人へ線を引き、一本も線が引けない人はいないか調べましょう。

❷一日も見逃さない

とにかく「毎日誰かが見守っている」状態をつくるために、あらゆる角度から見守っている人を調べましょう。散歩途中ですれ違う人、畑で接触する人、スーパーで出会う人など。

❸誰が見守っているか

見守りの必要な人には推進者が人材を募集して配置する場合が多いのですが、その前にまず、その人を今、誰が見守っているかをマップで調べるべきです。その人が最も見守りに適しているはずなのです。

❹直近しか見えない

他地区から見守りに出向いたり、見守りの範囲が一人５０軒程度という配置法もありますが、相手の動きが見えるのはわずかに５軒、つまり向こう三軒両隣に住んでいる人だけです。

❺本人が見込んだ人

誰が見守るかは担い手側が決めるという常識は、誤りです。（引きこもりなど）見守りの必要な人ほど、見守る人は自分で見込んでいるものです。一見いないようでいて、丁寧に探せば２人はいるはずです。

❻本人と接点のある人

見守り手が見つからない場合、本人が出かけているはずの場所、接触するはずの人を探しましょう。スーパー、コンビニ、診療所など。もしかすると、そこで悩みを打ち明けているかもしれません。

❼本人が見守られ努力

「夜１０時以降も電気が点いていたら気を付けてね」と隣人にお願いしたり、一日中ドアを開け放しにするなど、当事者も様々な努力をしています。それを探り出して、そこから接触していきましょう。

❽仲間で見守り合い

特に一人暮らし女性は、向こう三軒の一人暮らしの仲間と見守り合っている場合が多いようです。誰がキーマンになっているかを確かめて、そこから支援していきましょう。

男性の方がこのような助け合いが苦手なので、気をつける必要があります。

❾困り事に応えれば

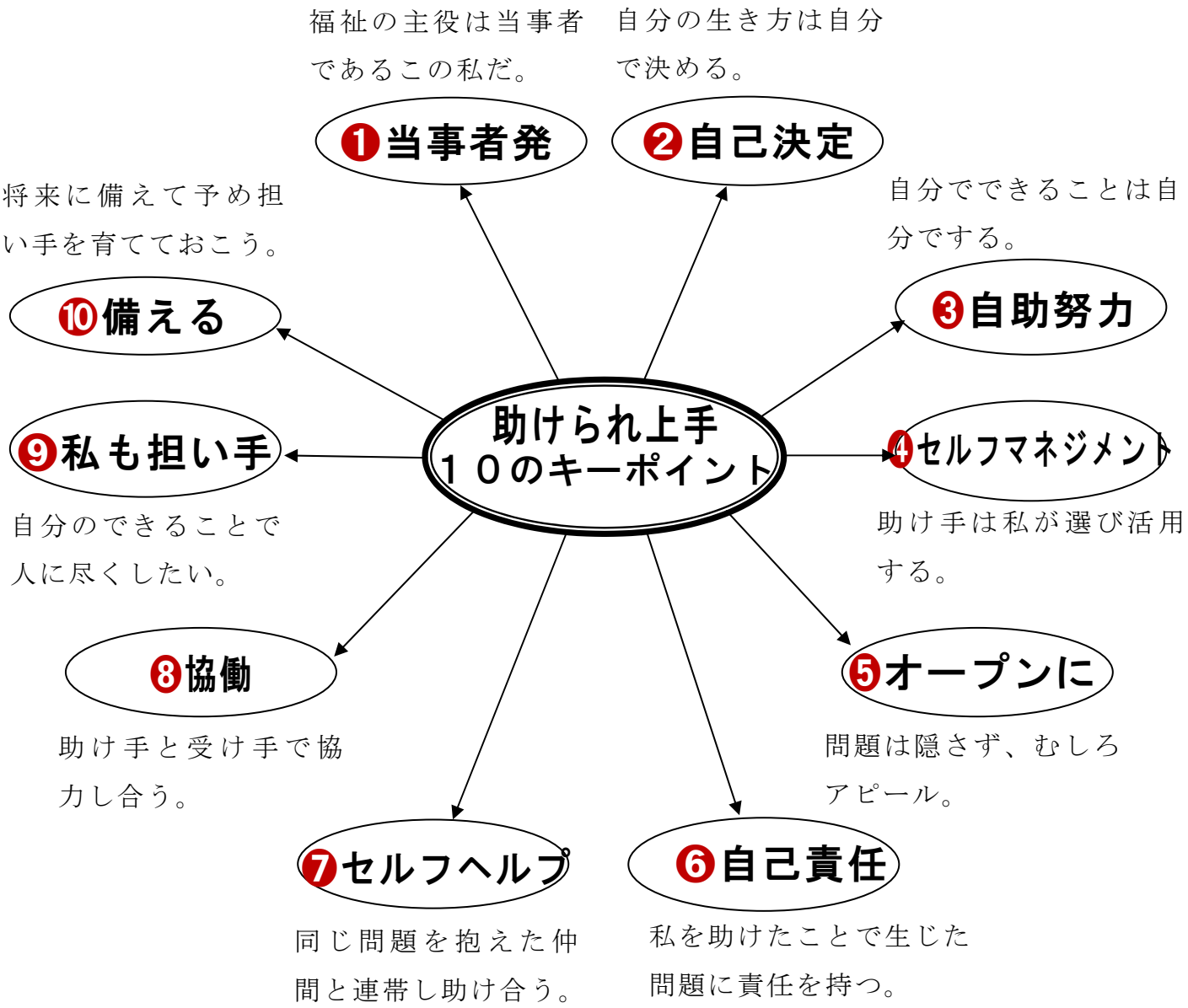
見守りが必要な一人暮らし高齢者は大抵、何らかの困り事を抱えています。それに応えてあげれば、積極的にドアを開けるようになります。見守りは困り事を解決してあげて初めて意味が出てくるのです。

❿こじあけも

引きこもりの人の場合、時には、多少強引な方法を使う必要がある場合もあります。そういう人の家に上手に入っていける「こじあけ屋さん」は天性の資質で、誰でもできることではないけれど、意外に受け入れられています。誰でも、本当は助けの手を求めているのです。

住民流で助けられ上手

私共が提唱してきた「助けられ上手」の発想がようやく社会に広がり始めましたが、この発想の最も重要なポイントは、これが「当事者発」という住民流の根幹となる理念から生まれたものだということです。改めて「助けられ上手」の１０のキーポイントを示してみましょう。



●解説●

❶当事者発

「助けられ上手」の根幹にあるのが、この発想だ。今の福祉は主導権を担い手が握っているが、それを受け手側が取り戻す。当事者の私が自分の困り事を周囲に向かって発信することから、すべては始まる。

❷自己決定

自分の生き方は自分で決める。私がどういう問題を抱えていて、それを誰に解決してもらうかも、この私が決める。担い手に勝手に判断してもらいたくない。

❸自助努力

自分でできることは自分でやる、自分の命は自分で守るという姿勢が基本にあるからこそ、困った時には支援を得られる。

❹セルフ（ケア）マネジメント

自分の問題を分析し、必要な支援を選択し、担い手を上手に活用していく、その全プロセスをこなせるようになること。助けられ上手とはつまり、自分のためのケアマネジメントができるということだ。

❺オープンに

自分の問題を隠せば、支援を得ることはできない。困り事を地域に向けてオープンにすることから、すべては始まる。要援護度が高まるほど、自分を開いていく必要性も増していく。

❻自己責任

助けられる側が主役となった時、主役には、おのずと責任も生まれる。移送など、支援活動には常に何らかのリスクが伴うことをあらかじめ理解し、何かあった時のことも想定しておく。

❼セルフヘルプ

同じ問題を抱えた人と連帯し、助け合う動きが広がっている。互いの経験を生かして仲間同士で助けと助けられの双方を体験し、共同で問題解決に取り組み、社会へ向けて問題提起していく。

❽協働

助ける側の行為が福祉であって、助けられる側はその客体にすぎない、ということではなく、両者が福祉という営みの協同作業をしていると考えるべきである。助けられる側の姿勢や能力次第で、成果は大きく異なるのだ。

❾私も担い手

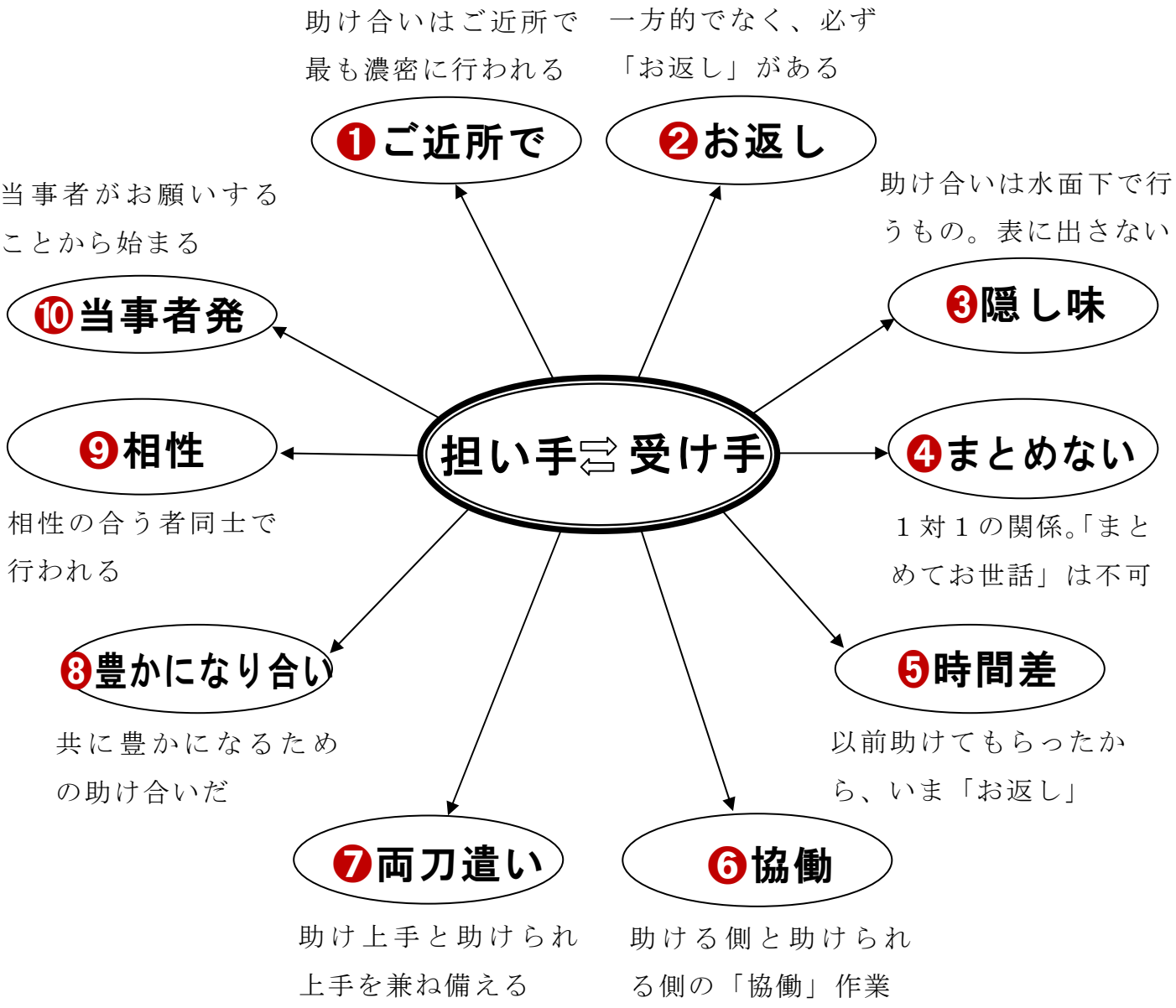
助けてもらうためには、自分もできる時に、できることをしなければならない。いま担い手として人を助けておけば、いずれは助けてもらえるし、体が動かせなければ心の活動など、できることを柔軟に考えてみよう。

⑩備える

今現在は元気だからいいというのでなく、いずれ要介護になった時に備えて、今から助けてくれる人を育てておく、助け合える相手を見つけておくといった、「備え」も必要だ。

住民流で助け合い

「助け合い」という言葉が、盛んに使われるようになりました。それはいいことなのですが、とにかく人を助けることが「助け合い」だという人もいれば、有償サービスの意味に使う人もいます。では、この言葉が言おうとしていることは本来何だったのか。その本質に迫ってみましょう。１０のキーワードを並べました。



●解説●

❶ご近所で

助け合いはどこででも行われているようですが、じつはご近所で最も頻繁に、濃密に行われています。生活の場だからこそ、一方的なサービスは馴染まず、助け合いになるのです。

❷お返し

助け合いは双方向。おすそ分けをすればお返しがくる。受け取らねば、助け合いはストップ。ボクシングのジャブの出し合いで、これを続けているから、その後に本格的な助け合いが生まれ易いのです。

❸隠し味

人から助けてもらえば、自分が隠したい問題が露わになるし、それに周りから関与されるのですから、プライドの危機です。それを知っているからこそ、人々は助け合いを水面下で実行しているのです。

❹まとめない

助け合いは一対一の関係、しかも相性の合う者同士の関係です。心が通じ合う２人が善意のやり取りをする。いただけば何らかのお返しもする。これは「集団的に」できるものではないでしょう。

❺時間差

「昔お世話になったから」と、数十年後に、相手が要援護になった時にお返しをするケースもあります。片方がお世話をしているように見えても、長い時間をかけての助け合いだったということがあるのです。

❻協働

助け合いは、助ける側と助けられる側の「協働」作業です。助けられる人が上手なら、助け合いはスムーズに進みます。「助ける」だけでなく「助けられる」も立派な福祉活動というべきです。

❼両刀遣い

助け合う以前に、それぞれが助け上手だけでなく、助けられ上手にもならねばなりません。人から助けてもらう経験をすることで、相手の気持ちが分かり、それだけ助け上手になれるからです。

❽豊かになり合い

私たちは、困った時に助け合うより、豊かになるために助け合う場合が多いのです。花の株分けをする、料理の仕方を教えるとか。そこから本当に困った時の助け合いにつ

ながっていくのです。

❾相性

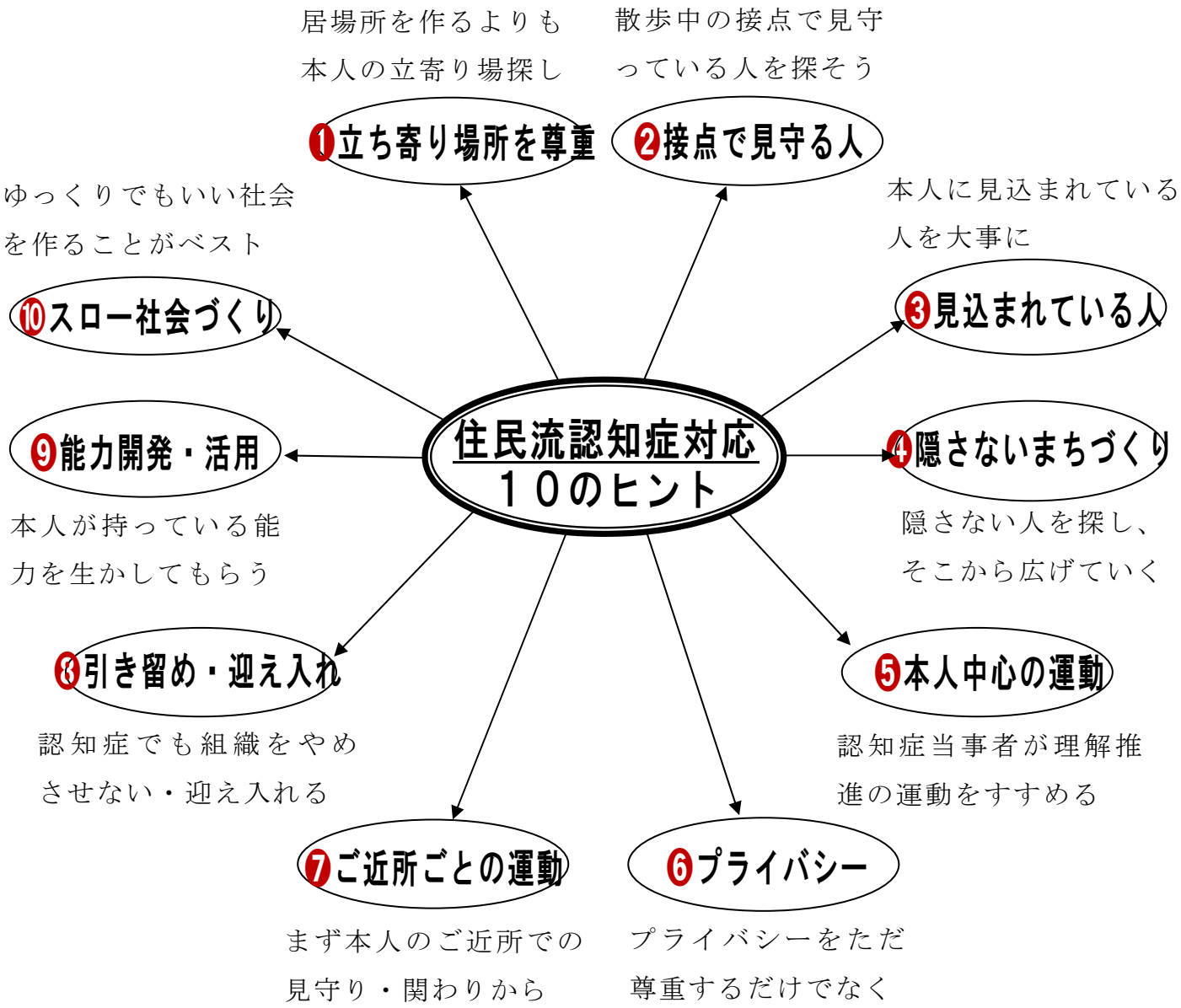
社会的な活動ならば、相性といった私的な感情論を持ち出すのは好ましくありません。しかし助け合いは私的で、プライベートな営みです。お互いの相性が合うことは絶対に必要な要件になります。

❿当事者発

助け合いは困り事を抱えた当事者から発するものです。何が困り事で、どうすれば解決しやすいか、誰にお願いしたいかは、本人が知っているのですから、理屈にも合います。

住民流で認知症対応

認知症対策が本格化していますが、何より大事なのは、本人目線の施策であること。以下に「本人目線の対応策」を並べました。例えば本人の願いは「私を第一線から外さないで！」でしょう。それが実現していないから「隠す」のでは？「ゆっくり」でも後ろから押されない、スロー社会を作るのが最終目標です。



●解説●

❶立ち寄り場所を尊重

居場所作りが盛んだが、本人はそれぞれ気に入った立ち寄り場所を見つけている。まずそれを大事にしてあげることが先決だ。認知症の人向けの集まりだけでなく、その人が行きたい場所を尊重しよう。

❷接点で見守る人

支え合いマップに認知症の人の散歩ルートをのせてみると、生活の接点で見守っている人がいて、さりげなく面倒を見ている。その人こそが真の「認知症サポーター」なのだ。

❸見込まれている人

講習会を開いてサポーターの認定をするのもいいが、本人に見込まれている人（世話焼きさん）がいて、その人の家や店が居場所になっている。こういう人を掘り起こして、必要な支援を。

❹隠さないまちづくり

家族が認知症であることをオープンにする人がいると、その周囲で、同じようにオープンにする人が出てくる。だからそういう人を掘り起こして、「隠さないまちづくり運動」を始めよう。

❺本人中心の運動

認知症への理解が深まる最高の方法は、本人たちが運動の先頭に立つことだ。認知症を隠す必要はないことも、当事者が前面に出てこそ説得力がある。認知症サポーターの役割はそれをサポートすること。

❻プライバシー

プライバシーをただ尊重するだけでは、認知症の人の命や安全は守れない。必要な場合は、プライバシーを開放してもらうよう本人や家族を説得することも大事だ。

❼ご近所ごとの運動

認知症の人の存在にご近所さんは気付いていて、日常的に見守っている。散歩コースもご近所近辺が多い。事実上プライバシーの存在しないご近所での支援が最適。その実践者にこそサポーターの肩書を。

❽引き留め・迎え入れ

認知症になると、本人は遠慮して所属するグループをやめていく。それを仲間も引き留めない。新たにサロンや趣味グループに入りたくても、迎え入れられない。受け入れ推進サポーターがいるといい。

❾能力開発・活用

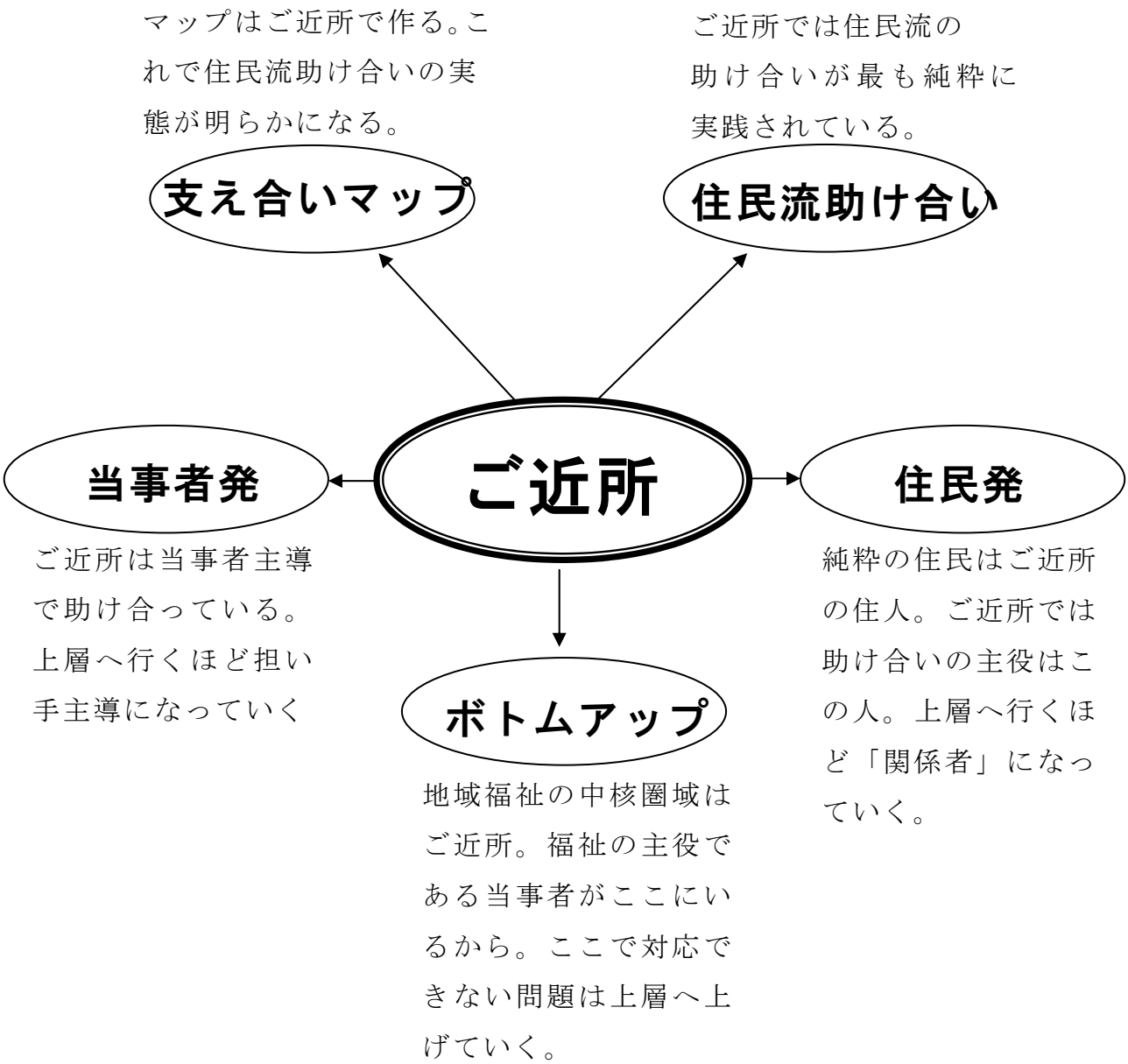
認知症になると、もう何もできない人といった見方をされ、敬遠されるようになる。その後は福祉の対象者として扱われる。認知症でも第一線から引かせない社会こそ、本当に福祉が分かっている社会だ。

❿スロー社会づくり

認知症の人の敵は、スピード第一、効率第一の文明社会そのものだ。そこでは認知症の人は、社会について来られず、危ないから地域に出るな、施設入所を、と言われてしまう。ゆっくり歩いても後ろから背中を押されない、むしろみんながゆっくり歩く「スロー社会づくり」が認知症対応の最終目的だ。

住民流の核心図

住民流福祉の発想が普及するにつれて、何が住民流の本質なのかわからなくなってきます。そんな時、下図を頭に入れておけば大丈夫。これが住民流の核心図です。６つのキーワードはすべて「ご近所」を中心につながっているのです。この中の一つが欠けただけで、住民流から離れていきます。



●解説●

●支え合いマップ（「要援護者マップ」ではない）

①マップはおよそ５０世帯のご近所で作る。

②住民は水面下で動いているので助け合いは見えない。マップ作りで助け合いが見えてくる。

③マップ作りで当事者発が見えてくる。当事者が担い手を掘り起こし、活用していることがわかる。

④マップを作ると、ご近所では住民主導で助け合っていることがわかる。しかも住民の流儀で。

⑤マップで出てきた取り組み課題は、その内容によって４つの層に振り分けられる。

●住民流助け合い（住民なりの流儀がある）

①助け合いは唯一、顔が見える圏域である第４層のご近所で行われている。

②住民流助け合いはご近所で最も純粋に行われている。上層へ行くほど住民流は薄れていく。

③住民流の柱は当事者主導である。ここから住民流のその他の特性が派生していく。

●当事者発（当事者が主役）

①ご近所を地域福祉の中核と位置付けるのは、ここに当事者がいるからである。

②当事者主導を実践するつもりなら、ご近所まで出掛けなければならない。

●ボトムアップ（「トップダウン」の反対）

①地域福祉は当事者がいるご近所から始まる。

②ご近所の実態をマップで調べ、取り組み課題を抽出。ご近所で対応できないものは上層へ上げる。

③マップ作りに各層が参加すれば自分の役分を持ち帰ればいい。ボトムアップでなく「振り分け」。

●住民発（住民が主役。「住民流を体得した人」）

①この場合の「住民」とは、ご近所で、住民流（当事者主導）で助け合っている人たちのこと。

②第２層以上で活動している人の多くは、住民流活動ではないので「住民」とは言わ

ない。

③多くの「住民」は担い手主導、推進者主導で行動しているので「福祉関係者」に近い。

④ご近所では住民流で動いている人も、上層に行くほど「関係者」になっていく。

●ご近所（「第４層」のこと）

①一般に言われる「ご近所」ではない。助け合いの最適範囲（およそ５０世帯）のこと。

②古代の地方行政組織「国郡里」の「里」は５０世帯だった。

③人間の「顔が見える範囲（５０世帯）」はそれから少しも変わって（進化して）いない。

④ご近所を第４層というが、当事者主導なら、正しくはここが第１層なのだ。市町村が第４層。